

高齢者とのコミュニケーションを通じて学んだもの

教員名：武山 雅志

学生名：荒邦有紀・粟津文葉・泉つかさ・市井久実子・井出菜摘・今崎加菜・岩部早季

1. 地域活動の概要

わが国における高齢化は先進諸国の中でも最も急速に進み、迅速な対応が求められている課題である。このような現状はかほく市において同様である。

核家族化が進む状況の中、学生自身が高齢者と接する機会が日常的に少なく、高齢者とのコミュニケーションに戸惑いを感じていた。そこで学生たちが認知症高齢者の利用する施設や高齢者の健康づくり活動に高齢者とともに参加することで、高齢者とのコミュニケーションを行い、それについて考える機会を設けた。

2. 地域活動の目的

学生自身が認知症高齢者の利用する施設にボランティアとして参加したり、高齢者の健康づくり活動に参加して高齢者と接する機会を設けた。そこで高齢者と実際に接することで高齢者といっても認知症の有無によってコミュニケーションの取り方が異なるのかどうか、コミュニケーションを取る際に何が重要なのかを明らかにするのが目的である。

3. 地域活動の具体的な内容

実施日時：平成 21 年 6 月 24 日、25 日 26 日

実施内容：

(1) グループホームたかまつ

グループホームたかまつにおいては、2名の学生が入居者に対する身の回りのお世話を通じて会話をする機会を得た。スタッフからは入居者の方たちとの接し方のコツについて教えていただいた。



(2) デイサービスぼぼ

デイサービスぼぼにおいては、5名の学生が通所者の方たちと会話やレクリエーションを通じて接する機会を得た。スタッフからは通所者への接し方の注意点の説明とともに、実際場面でモデルを示していただいた。



(3) クラブパレット 友垣健康クラブ

クラブパレット友垣健康クラブでは7名の学生全員が、高齢者 50 名ほどと一緒にダンスに参加した。また休憩時間やプログラム終了後に予め用意したアンケート調査に回答していただいたり、追加のインタビューにご協力いただいた。アンケート調査においては友垣健康クラブへの参加状況、参加による変化、接し方に関する希望などを尋ねた。スタッフには高齢者との接する際に注意していることを質問した。



4. 地域活動の評価

(1) 学生からの評価

学生自身は日頃、高齢者と接する機会が少なく、実習以前には「どのように接したらいいのか」と戸惑いをかなり感じていた。しかし各施設で実際に高齢者の方々と接する中で「無理に話しかけなくてもいいんだ」「過度に手助けしなくてもいいんだ」と気負うことなく「年寄り扱い」せず、ごく普通に「笑顔」と「優しい」気持ちで接すればいいことを学んだ。またコミュニケーションは単に会話だけではなく、体を動かしながら触れ合うことでコミュニケーションがとりやすくなることを実感した。

(2) 高齢者からの評価

多くの高齢者から日頃、若者と接する機会の少ないことが話された。そのため今回の実習で学生が各施設を訪れたことを非常に好意的に受け取っていただいた。また多くの方にアンケート調査にも協力していただくことができた。そして学生との会話の中で進んでさまざまな体験を学生に話していただけた。

(3) スタッフからの評価

今回、ご協力いただいたすべての施設のスタッフから実習後もボランティアを受け入れる旨、言葉をいただいた。学生たちはもとより各施設を利用している高齢者の方々にとっても得るところの多い機会であるとスタッフからも評価を得たものと解釈している。

5. 今後、この地域活動を継続、活発にしていくために必要なもの及び課題

高齢者が利用する施設や活動に学生たちがボランティアとして参加するためには、何らかのつなぐ機会が必要だと考える。参加しようとする学生がどのような動機を持っているのか、その点を列挙してみても「高齢者が好きだから」「接し方を学びたい」「何か役に立ちそう」「暇だから」「将来、老年看護をやりたい」などかなり幅のあるものとなるように考える。ボランティアを募集する施設のスタッフの期待も同様にさまざまなものだろうと想像する。

両者をうまくコーディネートする役割が不可欠であると考えられる。それがうまく機能しないと単なる人手不足解消の手段となったりマンネリ化したりしてしまう。その役割を大学教員自身が担っていくのかそれとも地域の社会福祉協議会のスタッフが担っていくのかそのあたりの検討が今後課題になるのではないかと

「看護大学におけるフィールドワーク型初年次教育の充実」事例実施報告書
と考える。

6. その他

学生たちにとって、自分自身がさまざまな形で役立っていると実感できる場としてボランティア体験はとても貴重なものである。また高齢者にとっても自らの知識や経験を語り伝える相手として学生たちに接する機会があることは、自己肯定感を高めていくものと考ええる。

世代間の関係が希薄化している現在であるからこそ、それをつなぐ役目の重要性が見直されるべきではないかと考える。